

## 1940, 50年代のアメリカ・ユダヤ系文学 (2)

稲 田 武 彦

### The Aspects of Jewish Americans in Their Fiction of the 1940s and 1950s (2)

Takehiko Inada

#### は じ め に

前稿 (工学院大学「研究論叢」: 第22号) で Holocaust や anti-Semitism およびイスラエル建国などの、いわば外側から Jewish identity にあたえられた衝撃にかかわる 40, 50 年代のアメリカ・ユダヤ系文学をとりあげたが、本稿ではそれにたいし、あるいは併行して、内的触発からくる諸要素をかかえた作品を通して当該時期のユダヤ系アメリカ人の相貌を探ってみたい。

いうまでもなく、この時点までに彼らはアメリカの現実に生存の根を深くおろしており、19世紀末の移民以来 Judaism の世俗化、すなわち Americanization (脱ユダヤ化) がたえず進むなかで、自らの Jewishness を却って負の形を通して内側からさまざまに触発されることになる。この観点から 作品理解の背景となる 戦後の Jewry については、すでに前稿の(A)―(3)で概説しておいたので以下列挙的に再掲すると、戦中、戦後のアメリカ経済の繁栄によるユダヤ系の中産階級入りと、それに伴う社会・経済的地位の向上。伝統的教育熱心による子弟のあいだの高等教育の普及と専門職への就職の増加。戦後の本格的郊外化現象の波にのる、いわゆる American ghetto からの脱出。異教徒のなかでの生活と生活様式の画一化。人口比減少などによる identity 消滅の危険。intermarriage による Judaism からの疎隔と改宗をめぐる確執。Jewish family の結束の弛緩。世代交替と世代間の抗争および違いの定式化。宗教生活の希釈化<sup>1)</sup>。ユダヤ共同体離れ。拝金主義や麻薬常用などにみられるモラルの低下。社会・労働運動による Americanization の促進等々である。

たしかに Judaism は Diaspora のなかにあって民族保持の上で一定の役割をはたしたが、Holocaust で東欧のユダヤ人世界は崩壊し、イスラエルの建国により Diaspora そのものの意味も薄れた。一方世代交替につれ、いまや生まれ育った国ア

アメリカには旧世界での ghetto も shtetl もなく、その世界はユダヤ系に開かれている。事実それに応じて上述したように、戦後の繁栄のなかで中産階級を中心とするより高度な消費・文化生活を現出させた郊外都市化の波、技術革新の進展と高等教育の拡充等そのいずれの点でも、ユダヤ系は彼らの才能と努力によって急速な進出を遂げ、もはや Depression のもと Lower East Side にうごめく移民の outsider ではなく、アメリカ現代社会の一部、しかもその典型的なタイプともなったのである。これは文学の領域においても、この時期だけでなく、これからのアメリカの現実を捉え得る素地をつくったということになる。

かくて Jewishness の希薄化、変貌はとどめようもなく、それを挺子に同化の浸蝕を防ぐわけにはいかない。これにたいし、もとより自閉から破滅を招きかねない頑な自衛をとるものではないが、それでもときとして浮かぶ幼少期の家庭生活あるいは宗教行事の記憶、親との軋轢で直面せざるを得ぬ伝統的価値、一族の交流の場でも感得されるユダヤの血の意識、intermarriage でつきあたる religious identity, さらに世俗化したと思われる生活のなかのなにげない動作、習慣にも根強く残る Judaism の痕跡——失われる identity のなかでそれらにつまずきながら触発される帰属意識の微妙な揺れ。そのようなユダヤ人像が画一化、疎外化を深めていく戦後大衆社会にあっては一つの手本ともなり、(ユダヤ系からみた場合 L. A. Fiedler によれば疎外がアメリカ現代文化へのパスポートとなる<sup>2)</sup>)、ユダヤ系文学作品の内容の複層化ないし普遍化にもつながっていく (Holocaust やイスラエルの場合のように直截的な衝撃として作用する形もあるが)。たとえば前回すでにみたように、anti-Semitism などの場合も人間存在のより一般化された状況——被害(疎外)意識や自虐性とかからんで——に通底し、ここでも特殊から普遍への文学的效果をたかめる。こうして60年代にはアメリカ全般にわたる ethnic power の高揚を背景に、アメリカ文学の主要な一部としてユダヤ系文学の“shocking で fashionable”な隆盛を招来するのである。(なお、前稿のあとの括弧内の表記については、以下いずれも工学院大学「研究論叢」を省略し、号数および頁数のみ示す)

### (1) 同化の徹底——dirty Jew のイメージ

徹底した同化の一つのケースとして、ニューヨーク生まれだが、父が撮影所長兼製作部長をつとめたハリウッドに育ち、自らシナリオライターの経験もある Budd Wilson Schulberg (1914～) の映画王国の成り上り者の物語 *What Makes Sammy Run?* (1941) がある。アメリカの現実とぶつかってこれを積極的に利用し、Jew-

ishness を意識的に抹殺ないし棄却して、ひたすら世俗的価値追求に向かう anti-hero (作者にいわせれば、「勝つか負けるかが正邪にとってかわった文化ではそうではない」<sup>3)</sup> となるが) は、醜悪さの程度の違いはあれ、A. Cahan の *The Rise of David Levinsky* (1917) 以来 S. B. Ornitz, B. Hect や J. Weidman の諸作にも扱われてきたところだ。いわゆる American dream の実現からすれば、これこそまさに typical いや ideal American の生き方を示すものといえよう。映画産業界に乗り出す主人公 Sammy は Weidman 描く衣料産業界の厚顔な事業家 Hary Bogen (*I Can Get It for You Wholesale*—1937—の主人公) と好一對である。

幼時に自ら Shmelka から改名したユダヤ移民の子 Sammy は、バイトで新聞売りになるやたちまち小才を働かせ、嘘をついてでも売り上げをのぼす。彼はニューヨークの街という腹から生まれた子であり、もはやユダヤ人などではない。劣悪な環境によって sex 体験も早く、13歳の成人式をラビに断わられようと一向に平気で、金こそ大人になった感じをあたえてくれるものだとうそぶく。16歳で「Record」紙の給仕となり、“little ferret (白イタチ)” のようにめまぐるしく走りまわりながら、首尾よくラジオ欄を担当することになると、著名作者の気をひいて自分の欄に利用し、さらに同僚のラジオドラマを自分のものとして売り込み、ハリウッドへ高給で迎えられる。その後もたえず映画関係者に自己宣伝を怠らず、良心のとがめを感じることなく他人の作品から脚本をつくり、あげくには自分の台本を代作させてこの世界を巧みに泳ぎ渡っていく。やがてシナリオライターの組合の内紛に乗り会社の意向を受けて介入、裏切りの見返りにプロデューサーの椅子を得るが、なおも野心はつきず、遂にウォール街の大物の娘との政略結婚もからめてボスを追い落とし、撮影所長にのし上がるのだ。

この小説のナレーターで、主人公と相前後しておなじ新聞社の劇評担当からハリウッドへシナリオライターとして移った“わたし”(これも改革派ラビの息子だが宗教的には非ユダヤ人も同然と自認) からみれば、Sammy は若者特有の感受性や内省とは無縁な人間であり、厚かましく鼻もちならぬ存在だが、一方でそのがむしゃらな行動力にひかれもする。Sammy にとっては、ハリウッドこそ自己を推進していくのにまたとない軌道であって、彼はその上を常に輝かしい未来をめざし、激しい情熱にかりたてられて疾走しているのだ。しかし生まれてすぐ大人になったかのごとく、小さいときから父や友だちに殴られても泣かぬ習性は冷酷、非情を助長し、あくまでも利己的で社会進化論を信奉する彼にあっては、第三者の立場からの見方の欠落となつてあらわれる。

このような主人公の自己批判もない同化の徹底で、倫理的には醜悪なといえるユダヤ人像に對置されるのが父と兄である。旧世界でダイヤの cutter の職業とその宗教に誇りを抱いていた父は、長男を pogrom で殺されてアメリカへ逃れ、ニューヨークでガラスの cutter として職工長になったものの、部下のストに同調して失職、手押し車の行商人となるような人物だ。Sammy が成人式を受けられぬとわかって落胆し、息子が死にでもしたように祈り、行商中もぼんやりしていて車にはねられて死ぬ。父の死に涙一つみせぬ弟と異なり、深い悲しみに沈む兄（その名も Israel）は chedder に熱心に通い、Talmud 学者になる素質があるといわれるほどだったが、のち settlement で長年働きつづけ、共産党にも関心をもつ。父の感化が醜くなれないタイプで、ユダヤの習慣・伝統の継承者として話し手の共感をよぶ。一方 Sammy を子供の頃から溺愛している母（いわゆる Yiddishe Mamme の一典型）も、いくら山の手へくるようすすめられても貧民街を出たがらない（さすがにそんな母には Sammy もきちんと小切手を送っている）。ともかく全体として、家族の者の生き方は主人公のそれを真向から打ち消すほどでないにせよ、対照的な undertone のように響き、作者の意識のどこかにひっかかるものとして受け取れるのである。

もっとも Penguin 版の1978年4月付の著者のあとがきによれば、「No longer the immigrant outsider, now the quintessential American, Sammy runs on into the twenty-first century.」<sup>4)</sup>とあり、ユダヤ人はたまたま身近な素材といった感があるが、しかしそれより、作者は執筆当時共産主義の影響下にあったともいわれているように（作中の兄にその片鱗がうかがえるが）、社会的関心からの見方もかなり濃厚で、父や自らのハリウッドでの経験を通してのものだけに、作品の売り込み、試写会の実体、ライター組合と会社の圧力、宣伝のため賄賂のからむ批評の内幕、プロデューサーと銀行の力関係、俳優たちの動き等がリアルに描かれ、作者自身、さきほどのあとがきで反社会的行為への警告として書いたものが business manual になる危険があると懸念を表明し、Sammy への epitaph となることを願っている。いづれにせよ、ハリウッドは American dream をかきたてるとともに、それ自体が一つの American dream の領域として、S. Goldwyn や Marx 兄弟などにみられるように、大衆娯楽を通してのユダヤ系の活躍を促したいいわば Americanization の拠点でもあったのだ。なお、Schulberg の社会的関心は擀取される prizefighter を扱った次作の *The Harder They Fall* (1947) などにも反映し、最近では彼自身ロサンゼルス Watts 地区で、暴動後社会問題にかかわる若い黒人作家たちの指導にあたっているという。



## (2) 脱出・解放の挫折——Judaism への回帰

Sammy 同様自己の才能の輝かしい実現 (=舞台女優への道) を夢みて、迷信の巢のような Judaism に背を向け、一見奔放な近代女性の生き方をとったかにみえた Herman Wouk (1915~) の heroine, Marjorie Morningstar (原題名も同じ——1955) は、意外にも (ミュージカルの作者・演出家で恋人の Noel Airman にいわせれば、なるべくして) 郊外の安泰だが退屈な upper-middle class のゴシップ好きな主婦 (Mrs. Schwartz) におさまってしまう。それは彼女に Sammy ほどのえげつなさがなかったのは確かだが、なによりも知らずに自らを欺いたところにある。しかも皮肉なことに、そのしっぺ返しは意識的に避けた Jewishness そのものから蒙ったといえることだ。

父は15歳で東欧より移住、店の小僧から身をおこし、現在羽毛の輸入商社の共同経営者として不況のなかにあってもなんとかやってきており、一族の出世頭である。母ももとは英語もろくに話せぬ移民の娘で町工場で働いていた。彼ら (特に母親) は娘 Marjorie に、自分たちのはたせなかったすべてのことをやらせたいと思っている。住居がブルックスからセントラル・パークに臨む West Side のアパートへ移ったのに伴い、女主人公はそれまでの生活を嫌悪して、ボーイフレンドも近隣の裕福なユダヤ系の息子にかえ、両親のやることは低級な異国趣味として自ら移民出身たることを隠そうとする。ユダヤ教会堂は敬遠し、子供の頃習ったヘブライ語も忘れ、苗字さえユダヤくさい Morgenstein を Morningstar にすることを考え、それに自分で天職と思う女優としての将来の名声を重ね合わせてみるのだ。Hunter College の学内演劇でミカドの主演をつとめ、喝采をあげた彼女はますます舞台への熱をつのらせ、友人を介して知り合った Noel Airman (これも改名でユダヤの信仰を棄てている、Noel はクリスマスの意) に憧れる。だが彼との交際のなかで、Marjorie は次第に自らの本性を衝かれていくことになる。

ユダヤ人たることは自分にとってなんの意味もないと思っている Marjorie に、Airman は彼女には自己認識が欠けており、それこそユダヤ人たることが彼女の全生活を左右していると指摘する。友人の情事にたいする本能的な嫌悪、sex の罪悪視、自ら処女を失うことへのこだわり、すべてモーゼ的意識に支配され、ユダヤ的良心に縛られた時代おくれのしつけのせいだといわれるのだ。これはなによりも端的に、習慣からとはいえ (あるいはそれ故にこそ)、戒律に反する豚肉がどうしても喉を通らないという肉体的拒否反応となってあらわれる。またあるいは、大食漢で社会の落伍者でもある伯父にどうしても親愛の情を抑えることができず、一族の集う Seder の

席で胸に訴えてくるものを感じずにはいられない。結局ブロードウェイへの夢も破れ、Airman にもてあそばれたあとほぞをかみながら、伝統的で宗教的な家庭を持ちたいと望む法律家と結ばれる結末には、作者の Jewishness 志向の目が強く働いているようだ。

本小説がミリオン・セラーとなったのは、ユダヤ系の upper-middle を揶揄しているだけでなく（一面ではアメリカの郊外生活のユダヤ化を示してもいるが）、戦後の性の解放という時流のテーマにもものったためであろう。それにしても、地位向上に見合うよう宗派を Orthodox から Conservative にかえた父親に、その亡父の供養は依然として Orthodox でおこなわせ、成人式や Seder、結婚式等のユダヤの伝統的儀式を熱っぽく描写するなど、この面での作者の思い入れはかなりのもので、のちに Judaism にたいする強い関心が読書界にもあらわれるようになると、伝統的ユダヤ教信仰の宣言ともいえる *This Is My God* (1959) を出している。因みに Wouk はニューヨークに生まれ、Yeshiva Univ. の出身である。

Marjorie のなかに Judaism が無意識のうちにしみついていたように、Arthur Miller (1915～) の短篇 *Monte Sant' Angelo* (1951) では、旅先のイタリアの片田舎で出会った行商人が Hebrews も Catholics かと尋ねるくらいまったく過去の Jewish identity を喪失しているのに、その父親がただそうしていたからという理由で、金曜には肉を食べず日没までに家へ帰ることによってユダヤの安息日を知らずに守っている姿をみ、また彼の紐の結び方が自分の父や祖父のやり方とおなじなのを知って、それまで宗教も歴史も持っていないと思っていたアメリカのユダヤ系の主人公がショックを受け誇りをとり戻す。このようなルーツ探し、ないし Jewish heritage への関心は、戦後は前稿 (No. 19, p. 106) で触れた Charles Angoff (1902～) に代表される。彼は50年代からその後20年以上にわたり、ボストンへの東欧系ユダヤ移民家族 Polonskys の連作形式による 龐大な自伝的年代記を発表し、20世紀初頭から50年間におよぶ一家のアメリカでの acculturation をたどりながら、遭遇するさまざまな問題を通して、アメリカのなかで歴史的遺産への繋りを弱めずにいく道を模索している。そこにはアメリカへの期待とともに、ユダヤ共同体の再生力にたいする楽天的ともいえる信頼がうかがえる。

異色なのはハーヴァードなどで科学教育を受けた Irving Fineman (1893～) で、Hasid の血をひく彼は30代半ばで小説に転じ、すでに shtetl の子供時代にきいた話をまとめた *Hear, Ye Sons* (1933) でユダヤ遺産にたいする愛惜と理解をみせたが、その後 *Jacob* (1941) や *Ruth* (1949) の聖書に取材した物語のほか、人類の進歩に

貢献する Judaism を Hadassah (ユダヤ女性によるシオニスト系団体) の創設者 H. Szold の伝記, *Woman of Valor* (1961) で示した。その他ユダヤ人たることの再発見を扱ったものに, Miriam Bruce の *Linden Road* (1951) や nostalgic ともいわれるが Samuel Astrachan の *An End to Dying* (1956) などがある。さらに60年代に入るとこの傾向は, *The Carpenter Years* (1967) の Arthur Cohen のほか特に Chaim Potok (1929~) に顕著で, *The Chosen* (1967) やその続編 *The Promise* (1969) などで Hasid の家庭生活, 伝統的宗教儀式, 神学上の論争をとりあげ話題をよぶことになる。

一方この時期エッセイの分野では, Lower East Side に育ち「The Carolina Israelite」紙の編集者で「Jewish Mark Twain」といわれた Harry Golden (1902~) が, Jewish source による humorous essays や stories を提供し幅広い人気を得た。また50年代に入って「Partisan Review」や「Commentary」に論文, 批評をのせ始め, その社会主義の立場から「Dissent」誌の編集・発行にもたずさわった Irving Howe (1920~) は, 文学批評・研究家としてはイデオロギーにとらわれず S. Anderson (1951), W. Faulkner (1952) などすぐれた作家評伝・研究を発表したが, 彼がはやくも10代に政治的・社会的関心を触発されたのは, 大不況下の移民の子として嘗めた辛酸によるもので, Howe 自身は人一倍の努力を強いられたことをむしろ利点と考え, たとえのちにいくら離れることになったとはいえ, 当時の家庭での体験を通してユダヤ伝統と生活様式を受け継いだことは重要だったと認めている。そのような認識を背景に彼は1955年 E. Greenberg とともに *A Treasury of Yiddish Stories* (52篇のアンソロジー) を編み, 詳細な introduction を付して英訳ではじめて彼らの文学遺産の本格的紹介をおこない, 最近では, 1880年代から始まった東欧系ユダヤ人のアメリカ移民の社会史を East Side の生活を中心にさまざまな資料によってパノラミックに跡づけ, 大冊 *World of Our Fathers* (1976) として刊行しベストセラーになっている。

### (3) 家族的絆の分断——孤独と融和

開かれたアメリカの現実是否応なく Judaism の核をなす家族の成員それぞれに力をおよぼし引き離す。そのような家族の絆のばらばらになったなかでの孤独とその融和を描いたのが, Marjorie とおなじ Hunter College のユダヤ系女子学生を heroine にしたウィーンからの亡命者 Frederic Morton (1924~) の *Asphalt and Desire* (1952) である。

Iris Leavis は学内紙の編集をやりジャーナリストを志望、そのためには virginity を賭けてもよいとまで思っている。多少の逡巡のあと結局彼女もボーイフレンドに体を許し苦い思いをするが、これも大人になる一方法にすぎないと自ら慰める。その過程で、当時の学生間の slang と思われるものを多用する娘を母親は理解できず、弟は Cornell Univ. のヒッピータイプの学生で、親の望む店の手伝いはせずになにやら政治活動にたずさわり、大学も中退するつもりでいる。父は父で、もともとワルシヤワの Talmud Torah school の俊秀だったのが、アメリカへやられ母と結婚してから人生が狂う。母は自分の思惑から父に薬局をやめて宝石商の道へ進ませ、彼の社会主義思想も放棄させたのだった。やがて不況により没落した父は氷配達などして凌ぐが、鈍感さをよそおい自ら不甲斐ない夫、父親となることで母に復讐をはかる。母にしても、ふたたび始めた薬局の家業は自分の一生を駄目にした罫であって、アメリカにこなればの思いにとらわれている……こうしてだれもが自己のうちにこもり、孤独への呪いを抑えている。しかし、やがてだれか（たいてい母親）が耐えきれなくなり、それをきっかけに大声をあげておたがいの孤立の業病を剥ぎとりにかかるのだ。そうやってどなり合うことが却って昔の親密さをとり戻す手だてとなり、まといついていた孤独感が遠ざかる。

元来 Diaspora のなかで国を持たぬユダヤ人たちにとっては、血の結束こそが精神的にも物理的にも自己存続の道であり、殊に一家のそれがいやでも要求される。本能的な要素も加わり、母と子（息子の場合が多い）の繋りが作品でも目立つのはこれまでみてきた通りだが、兄弟姉妹間（この小説では姉の弟へ）の親和や愛情を扱ったものもある。発表は1967年になるが、死んだ母の指輪や投資をめぐる一方的に長兄を憎み、彼の乞う和解を拒み続けた妹が死の直前やっと兄の見舞いを許してともに抱き合う S. Bellow の短篇 *The Old System*, 同一作家の長編にみられる兄弟の結びつき (*Herzog* など), あるいはユダヤ的要素を顕在化させない Salinger でも、外界での異和感に悩まされる（女）主人公が兄や妹によって救われる設定に血の意識は色濃い。アメリカでは、かつての旧世界と違って直接身の危険はないものの、家よりも個人という独立的風潮ないし同一世代への水平志向<sup>9)</sup>, 家族成員の離間さえ招くさまざまな機会、そしてなによりも進行する Jewish community の衰退等で絆の弱まりは避けがたい。ここに描かれる親和や融和は、そのような血の繋りの喪失を通しての己れらの identity 確認といえるだろう。

## (4) 世代間の相克——父と息子の抗争と和解

広くいえば前項の一つだろうが、より積極的な対立・抗争によって多かれ少なかれ Judaism の継承が断たれる危険を招き、また同化の進行をはっきりと示すものともなる。もともとのテーマはなにもユダヤ系に限ったわけではなく、しかも以前からくり返されるところで、特に価値変動のめまぐるしい現代社会にはつきものといえるし、一方 Freudism による心理的力学から作品化される場合も多い。これをアメリカのユダヤ系移民についてみれば、移民そのもののもたらすショックで価値変動の振幅がより激しい上、殊に同化能力に富んだ子供たちが、その親と public school や街頭を通してのアメリカの現実との板ばさみになるため必然的に出てくる問題であり、具体的には Yiddish などの両親の言葉にたいする恥、彼らの権威や意向への抵抗、synagogue (宗教生活) の拒否、早期独立等となってあらわれ、Jewish life はいやでも縮小する。こうして経験と記憶の相互作用による identification の形成基盤たる継承は損われ、D. Bell が注5) の論文でいうように、第1世代は ghetto や pale を逃れたが、第2世代以降は過去そのものを逃れて同一世代が唯一の絆となってくる。とりわけ従来父系社会の要素の強い Judaism では、父と息子の対立が Jewish community の基礎でもある家庭の結束と存続をおびやかす、アメリカの風土のなかで宗教生活を主宰すべき父親の神格化、その権威の絶対視はますます薄れ、逆に幼児期の(息)子と母親の関係が B. J. Friedman の *A Mother's Kisses* (後出) の場合のように誇張化されるまで前面に出てくることにもなる。自分の跡とりとして、また Kaddish (死者への祈り) を唱えてくれる者としての息子の喪失は、たとえ自ら宗教生活に熱心でない父親にとっても、Sammy の父にみられるように大きな痛手になるのだ。その典型的な例が、第2世代より若く、50年代から創作活動に入った Herbert Gold (1924~) の自伝的な *The Heart of Artichoke* (1957) にみられる。

13歳で自ら決断し、ロシアを密出国して渡米した主人公の父は、夜学で英語を習いつつ水売りや果物の行商を始める。その後アメリカを転々とし、ギャングやてき屋に脅かされながらも、彼はクリーヴランドで人を使う青果店をひらくまでになる。一方中学に入った主人公は、父がすでに自分の食い扶持をかせいでいた年になっても、いつけられた店の手伝いをろくにせず、同級の女の子への憧れと Poe の詩に没頭する。そのような息子を両親は息け者の役立たずとみて、親類にも顔向けができないと思う。特に長男の主人公に店を継がせ、自立に備えて世の中を知ってもらいたいと願う父親は、ついに愛するあまり店番をすっぽ抜かした息子を平手打ちにし二人の格闘となるが、息子の反撃にショックを受けた父は失望の涙にくれる。息子は近所のホワ

イトカラーの父親たちにくらべ、早朝から働きづめで言葉の訛など外国人然たる父を恥じ、子供が抱く周囲との融和感への憧れを両親が理解せず、自分の世界が締め出されているのに反撥して彼らの提供する人生を拒否するのだ。

この作品はのちに長編 *Fathers* (1966) の一部となるが、父子はその後はっきりとした和解の時はもたなかったものの、暗黙のうちにおたがいの領域を認め合う。主人公はやがて作家への道を歩み、父は不動産業に転じて80歳になっても敢然と人生に挑んでいる。渡米後兄弟を次々に呼び寄せて、大不況のなかで anti-Semitism に悩まされながら、ときには人を雇って暴力による復讐までやってのけ、自らの道をきり拓いてきた父の生き方に、離婚のはめにいたった息子は自分よりも勇気があることを認める。このほか 始めと終りの部分でロシアに残った“父たち”のことが言及され、pogrom の恐怖を Hasidism の踊りで忘れようとする村で、曾祖父は徴兵逃れのため“かたわ師”によって片目にされ、Hasid の祖父は free thinker となって無神の国アメリカに渡る息子（主人公の父）に背かれ、結局第1次大戦中おそらく pogrom で殺されたと思われる。最後に主人公は父たちの生きざまをふり返り、子孫の自分たちひとりひとりが彼らの犠牲や妥協や適応のいろいろな痕跡を残しもっていると考え、四代にわたる各世代のあいだの確執のなかにも Judaism の継承を感じとるのである。時期や形はさまざまだが、抗争のあと和解もはかれるところに、薄れていく記憶にさえ伝わる民族の血の働きとでもいったものがあるようだ。

後述する S. Bellow の作品でも、世俗的成功一辺倒の父親にたいする息子の反撥がある一方で、わがまま故の人生の失敗者たる息子への父の厳しい批判の目も描かれており、たとえば金、女、改宗などをめぐって父の憤激を買う Herzog のように、同化のなかで愚行を重ね墮落していく息子の不道德が父との不和を招く（注一12参照）。いずれもアメリカの現実によって生ずる世代のあいだの亀裂の諸相を示している。この Bellow とおなじくシカゴに生まれ育って、高校・大学時代からその友人でよきライバルでもあった Isaac Rosenfeld (1918~56) も、唯一の自伝的長編 *Passage from Home* (1946) でユダヤ系父子の衝突を扱っているが、再婚した父との Oedipus complex 的関係にある主人公が、死んだ母の代りにその妹の Minna 叔母を頼って家を出たものの、やがて父の許に戻って和解するというものだ。ついでにいえば、作者の夭折後まとめられた短篇集 *alpha and omega* (1966) は知的創造力をうかがわせ、政治や愛のテーマにその関歴（学生時代の政治活動、後年のライヒ信奉やヴィレッジでのボヘミアン的生活）の影響を感じさせるが、総じて Jewishness を強く意識したものではない。ただカフカの ambiguity とややグロテスクなユーモアのほか、

主人公がユダヤ系のものに漂う一種のペーソスに、それとないユダヤ人気質がかぎとれるかもしれない。

### (5) Intermarriage による religious identity

これは比較的古くからとりあげられてきたテーマだが、当事者が自己の identity について二者択一的にいやでもぶつからざるを得ず、また Americanization の直截なあらわれで、ユダヤ文化・宗教内容の希釈化をもたらし恐れがあるため、かつては家庭生活を通して Judaism そのものが保たれてきたことを思えば、Jewish community 存続にとっては重大な脅威となるから、内的触発のなかでも positive なショックをあたえるものとしてより意識的対応を迫られることになる。この mixed marriage をめぐる緊迫した事情を扱い、religious identity debate などそのテーマの徹底的考究をおこない、現代の Jewish life の諸相——ユダヤ教会堂活動、家庭生活、大学の非ユダヤ世界との接触等——を示したといわれるのが、ボストンの Jewish community の出で、新聞人として活動するかたわら著作にたずさわってきた Myron S. Kaufmann (1921~) の *Remember Me to God* (1957) であり、登場人物の vivid な描写でも知られている。

ハーヴァードのユダヤ系学生 Richard Amsterdam は、かねてからアメリカの真の支配者であるニューイングランドの実業家の世界にひかれ、やがてダンスを通して Radcliffe の肉感的女子学生（キリスト教徒）と恋仲になるが、彼女の父親は真剣な結婚を望むなら改宗しないのは理解できぬと、Judaism の狭量さやユダヤ人の満たされざる慾求を指摘する。その言葉に触発された Richard は、カトリック教会の十字架を前にしてユダヤ人としての改宗への決意を固め、次のように考える、「.....his conversion would be a truer assertion of himself, because he would insist on his Jewish blood all the more. As a Christian by conviction, of Jewish origin, he would publicly champion various causes of the Jews. Everyone would know exactly what he was.」<sup>9)</sup>

こうして重荷から解放された気になった彼は、Congregational Church の洗礼を受けるつもりで家族の者と一線を画そうとするが、Passover に家へ帰ってくるよう寮に説得にきた下級裁判所判事の父と改宗をめぐる議論となる。息子はユダヤの separatism より キリストの larger liberation をよしとするから、このままでは虚偽の生活を送ることになり良心に反する、宗教はあくまで自ら選んだものでありたいし、またその自由こそアメリカで保証されていると告げる。さらに自分の望むニュー

イングランドの生活では、Puritan の伝統、大学、実業界すべては教会の骨組のなか  
にあって、Yankee の生き方とその inner value を認め向上しようとするのに改宗  
を恥じるいわれはないし、ユダヤ人への裏切りにもならぬ、ドイツやその占領下のユ  
ダヤ人を救うには軍隊へ入って戦うしかないのだと主張する。これにたいし父は、改  
宗せずとも Christian charity を示すことはできるし、宗教はセメントのようなも  
ので家族を一つにするのだとひきとめる。おまえはおまえでないものになろうとして  
いる。こちらはただおまえが自らユダヤ人であることを知り、そう口にするのを求め  
ているだけだ。結婚は認めてもよいが彼女のほうを改宗させよ。宗教はなんであれ、  
それに属している個人がその手本であって、その人がよければその宗教もよいとされ  
るのだ。自分もそのつもりでやってきた、ユダヤ人に生まれた事実は変えられぬし、  
また誇りに思っている。ここでキリスト教徒になったら、ユダヤ人たらんとして火あ  
ぶりの目にさえあってきた先祖の苦労はどうなる……こうして父子の言い分は平行線  
をたどり、あげくの果て母親との約束ゆえどうしても Passover に出席させようと、  
父は逃げる息子のあとを追ひ平手打をくわせる。

その後主人公は大学の Dean の意見に従って、すでに日取りもきまった結婚式を  
目前にしながら、彼の家の Reform のラビと会うことにする。ラビはどこまでもユ  
ダヤ人としての存在が基盤で、アメリカは小さい communities で成りたっているの  
だから、アメリカ人たることはユダヤ人を通してであり、ニューイングランド人とは  
その上でおたがいに交流によって学び合えばよいのだと Richard を説得にかかる。  
American Jews と接触を断てば一種の expatriate となり、神との結びつきだけで  
なくアメリカとの絆も失うことになる。元来ユダヤ人はどこにおいても aliens な  
のではなく world-folk だ。ヴィタミンのように一国の生活に入っていって native  
culture に味つけをし、human experience の風味をあたえる humanizing leaven  
である。それに彼らは古くから拡散した種族だから、その血をかかえた国はすべての  
時代、国民と結ばれている感じを持つ。歴史の浅いアメリカならなおさら、人類の偉  
大さを知るため彼らを必要とする。アメリカではユダヤ人は英語を話しそれで考え、  
Shakespeare をたのしむ一方で Bible を提供する。神とイスラエルの契約もいまや  
世界のもので、ユダヤ人は特別な役割をあたえられており、人間自体の要約といっ  
ていい。moral law を実現する願望とその蹉躓のくり返しのうち今日まで根強く生きて  
きたが、これは神との対話によるものだ。彼らは人間の極致として最大の仕事を課せ  
られ、それだけ失敗も大きく常に殺戮の危険をくぐり抜けてきた……ここで Richard  
はユダヤ人のみを特別視するラビの言説をうさんくさく思い、自分は Pilgrim



Fathers のように前向きに子孫のことを考えて、父の家は継がず自らの生活を築くつもりだし、split personality には耐えられぬから改宗するのだと反駁、最後にラビ自身神を信じているのかとつっ込んで相手を一瞬たじろがせる。

ラビとの再度の論議の場を拒否した主人公は、改宗のため牧師のところへ“信仰告白”にいく。自分は人生を真剣に考え、できるだけ最良の人間になりたいと思っている。それには人を向上させる最上の手本として Puritan の堅実な旧家が望ましい。自分のユダヤの家庭のように息子を殴るなど manner が悪く、選民のたわごとを信じ、神を信じてもないのに信じなければと考えてますます葛藤を生んでいるのは愚かしい、結婚を妨害するのも許せないと告げる。牧師は、父親は Richard を必要としているのだから Christianity の点からいっても彼を愛すべきであり、また Old Testament の予言を信じなければキリストにおけるその実現を信ずることは難しいはずだとたしなめる。さらに主人公が、キリストを信ずるのはその倫理的教えを信ずるということで、平均的クリスチャンとおなじ程度の信仰者として洗礼を望んでいるのだと答えるや、疑念をつのらせた牧師から、結局彼は改宗を合理化し、神抜きでやろうとしており、Bible にあるキリストの事蹟を信じられないなら洗礼はできない、自分は人々をキリストのもとへ連れていくので、Beacon Hill (ボストンの金持ちの世界) へではないと断わられてしまうのである。

この作品の場合、かならずしもただ自己嫌悪でユダヤ人を逃れるためとか、社会的地位向上だけをねらう打算が先立ったわけでもない(わずらわしい親への反抗は認められる)が、あまりにも近代合理主義に流されて便宜的改宗に走り、結局宙ぶらりんの状況に追いやられ、あらためて自分の identity を問われることになったものだ。それにくらべ、はっきりと自己嫌悪に浸された intermarriage を扱ったのが Norman Katkov の *Eagle At My Eyes* (1948) で、とび出してきたユダヤ社会と入っていけないキリスト教社会とのあいだを揺れ、その裂け目を愛も橋渡しすることができない。その他この種のものでは、J. Weidman (1913~) にもユダヤ人と非ユダヤ人の関係の巧みな分析を含む *The Enemy Camp* (1958) があり、60年代に入っては、カトリックのボーイフレンドとのあいだにできた胎児について、ユダヤ人たることの問題につきあたったユダヤ教徒の女主人公が自殺をとげる Barbara P. Solomon の *The Beat of Life* (1960)、逆にユダヤ教徒の男がカトリックの女と結婚し、双方が相手の家族から改宗を迫られたり、shikse はけしからぬと罵られたあげく破婚となる Neal Oxenhandler の *A Change of Gods* (1962)、子供の目からみた intermarriage とその結果を描く Samuel Yellen の *The Wedding Band* (1961) など

がある。

結婚の問題ではないが、クリスマスの行事を通してユダヤ系移民のキリスト教とのかかわりを、ブロンクス生まれで Hunter に学んだ Grace Paley (1922~) がその短篇 *The Loudest Voice* (1959) で捉えている。大声の持ち主の小学生の娘がクリスマスに学校のキリストの生涯を扱ったパントマイムにナレーターで出るのをめぐり、東欧系移民の両親の意見が対立する。いくら安全なアメリカでも、子供が多くの嘘をおぼえさせられるのはなくずしの pogrom も同然だと危惧する母親にたいし、父親は歴史によればクリスマスももとは異教徒時代からのもので、ユダヤの Hanukah にも似た行事だし、娘もこの体験で将来狭い考えにとらわれず生きていくことになるだろうと理解を示す。ここには宗教行事を媒介にしての acculturation が示唆されているが、この短篇の収録されている短篇集 *The Little Disturbances of Man* (1960) の他の作品では、母子家庭を題材に前夫や幼なじみの男などとの交流を描いたものが多く、ユダヤ的テーマをまともに据えたのはみあたらないが、Diaspora を信じて人工の国イスラエルに反対の heroine や、ユダヤ人のアメリカへの貢献を誇るべきだという娘など、その identity をはっきりさせた人物も登場させている。それから改宗のような積極的方策をとらないだけに、自らの Jewish origin を悔み、素姓を隠そうと絶望にかりたてられる Ruth Seid の *Wasteland* (1947) の hero などにもこの項のテーマがかかわってこよう。

#### (6) Judaism の自己解剖——caricature から black humor へ

Judaism からの detouch は一方で客観的立場における自己検討となり、自らの戯画化、諷刺、自虐、弱点や歪みの剔抉などへいき、この点しばしば Jewish community で物議をかもすのが Philip Roth (1933~) の場合である。彼はユダヤ人の Americanization を前提にしながらも、感傷を排し理性的に彼らの内側に踏み込んでその俗物ぶり、宗教的偏狭さ、あるいは狡猾さを痛烈に衝き、いわばユダヤ人であることを逆手にとって、かつての図式的被害者像にとらわれない現実のなかのユダヤ人への認識を示してみせる。Allen Guttman によれば、「.....he is the most talented, the most controversial, and the most sensitive to the complexities of assimilation and the question of identity.」<sup>7)</sup> ということになり、事実その中・短篇集 *Goodbye, Columbus* (1959) は処女作ながら National Book Award をとり、作者の新進作家としての力量をみせたものである。

タイトルとなっている novella の主人公 Neil Klugman は大学 (哲学専攻) 卒業

後軍隊にいき、いまは公立図書館に勤める23歳のユダヤ系青年で、喘息治療のためアリゾナにいる両親と別れてニューアークの下町のうだつのあがらぬ叔父夫婦のところ  
に寄宿している。一方恋人 Brenda Patimkin は、父が浴室・台所用流しで戦時中に  
兵舎を手がけて儲け、いまや町なかからニューアーク郊外の高級住宅地に移り住むス  
ポーツ好きの一家の娘で、Radcliffe の学生。ストーリーはこの二人の1957年夏のブ  
ールサイドでの出会いから秋の別れまでの短い恋物語で、なんのてらいもないむしろ  
明澄過ぎるぐらいの青春小説だが、そこここに Judaism のうっすらとした影も落ち  
ている。若い二人の無信心ぶりは当然としても、娘の母(Orthodox でハダサの会員)  
には男の所属教会堂が気に入り、家のなかには息子の成人式の写真が飾られ、その結  
婚式にはラビの相談が必要といった具合だが、作者は主人公にそれらにたいし斜に構  
えさせるだけでなく、ボストンでの密会のためには、職場にたいする休暇の口実に聖  
なる Rosh Hashanah (新年祭) や anti-Semitism まで持ち出させている。その他  
Neil の叔母の料理への偏執、Patimkin 一家の猛烈な食事風景、アメフト選手だっ  
た息子の結婚式での親族たちや主人公の職場の同僚の戯画的描写、郊外と町なか、成  
功者と失敗者の対比がなされ、そこには Jewish community とその周辺のアメリカ  
の現実を皮肉も交じえながら乾いた目でみる Roth の視点が感じられ、はやくも作者  
の持ち味をうかがわせるのに足りる。結局主人公が相手に強要した避妊具が母親にみ  
つかったため、夏休みに招待された娘の家での行状が暴露され、裏切られた両親の許  
へ戻るしかない娘の抗弁で破局となるが、スポーツや情事を通しての Americaniza-  
tion が描かれる一方、叔母の旧世界に留まることも成金の家庭に入ることもできな  
い Neil の identity についての自問は漠然としたまま終る。

ユダヤ人なるが故に聖なる祝日や戒律を楯にのうのと利用して恥じない話は、短  
篇の *Defender of the Faith* によりどぎつく扱われ、その Jewish condition の否  
定的叙述が Jewry における 非難を呼んだといわれている。ヨーロッパ歴戦の勇士  
Marx 曹長(ユダヤ系)は内地勤務となり新兵訓練にあたるが、中隊の一ユダヤ系兵  
士はおなじユダヤ系としての団結と連帯を訴え、曹長になにかと特別扱いを求める。  
ところが、まず金曜日の礼拝出席の公認化をせしめると、それはどうやら当夜の G・I  
Party (兵舎掃除) 逃れであるらしく、次には kosher でない軍隊の食事に文句をつ  
けるため父親から国會議員に手紙を出させるが、実は自分が代作したもので食事も平  
気で食べていることがわかる。最後に一か月遅れで招いてくれたと称する親類の  
Passover へ出るべく、外泊許可を渋る曹長にそれでは同胞による迫害だといいたて  
無理やりそれを認めさせる。しかしそれも、招待日をまちがえていたなどとみえすい

た口実を設けて中華料理を食べてきたことが判明、勘忍袋の緒を切った Marx は、その兵士がユダヤ系の人事係にコネをつけて内地勤務にまわしてもらっていた任地を太平洋行に変えさせてしまい、彼から anti-Semite 呼ばわりされるのだ。はたして信仰の守護者はどちらか、すくなくとも Marx は正義の擁護者とはいえるであろう。

全能の神にたいする子供の素朴な信頼がラビのキリストについての習慣的かつ現実的解釈を破り、屋上からの身投げのおどしでキリスト教へ改宗させる場面を寓意的に示すものに *The Conversion of the Jews* があるが、信仰をめぐる微妙な反応をやや奇矯な形で出してみせ、Jewish psyche についての代表的作品とされるのが最後の収録短篇 *Eli, the Fanatic* である。戦後ユダヤ系市民が土地を買い、異教徒とともにおたがい極端な慣習を慎み妥協して生活している牧歌的な町へ、ナチの迫害を逃れてきた Hasid らしい難民が居住地区を無視して寄宿制の Yeshivah をひらく。わが子をいけにえにする父親 (Abraham) の話など教えるのは宗教でなく病気だと思っような信仰離れのしたユダヤ系住民は、この20世紀に時代遅れで異様な服装の真正正統派を前にして動揺し、ひたすら彼らの立ち退きを希望する。一方寄宿学校の校長も周囲の狼狽を理解できず、住民の意向を受けた弁護士 Eli の再度の交渉にも応じようとしな。Eli の身重の妻はフロイトに関心が強く、板挟みになっている夫を neurotic というが、思いあまった彼は自分の服その他一式を黒服で町にやってくる Yeshivah の助手に届ける。すると子供の生まれる朝、助手が Eli の服をきてあらわれ、いままでの黒服や帽子を置いていく。彼はなんとなくその帽子をかぶったりしているうちに、いつしか黒服まで身につけ Yeshivah に向かい、自分の服をきている相手を見て自分が二人いるか、あるいは二つの服をきている一人の人間であるかのように感じ、identity の混交と葛藤が生じる。しかもそのまま町のなかを歩いたため、彼が自ら crazy になるのを選んだのだから間違いではないと考えても、人々は彼を breakdown だと断定する。病院で赤ん坊に対面した彼は、将来息子にもこのような黒服をきせようと決意するが、住民の相談を受けたインターンに鎮静剤の注射をうたれてしまうのだ。彼の突然の変容を妻はやましきからと思うが、Eli はかねて助手が迫害でなにかも失ったことに同情を寄せ、彼が右の拳で胸をうって嘆く姿をみて不思議な感銘をおぼえ、その真似さえしてみている。ここからは相手への自己同一化と考えられるし、あるいは最後に「The drug calmed his soul, but did not touch it down where the blackness had reached.<sup>9)</sup>」というところから、本質的ユダヤ人への改宗 (信仰の復活) ないし宗教の感化力をいう評者もあるし、さらには (信条

的) 制服のもたらす狂気という今日的課題も引き出せるかもしれない。

いずれにせよ identity の問題に辛辣な wit を示すもので、伝統的価値と新たに確立された (upper) middle class のユダヤ人の繁栄との conflicts をとりあげる Roth の姿勢は、60年代に長編のなかにもいろいろな形で受け継がれていく。identity の根を持たない大学教師の主人公をはじめ、疎外されている Jewish characters に intermarriage のはらむ緊張をからめて、理性と感情の交錯を描いた第1作 *Letting Go* (1962) のあと、問題となった *Portnoy's Complaint* (1969) では、子供の頃母親から Judaism による厳しいしつけを受けた自己嫌悪のユダヤ系の主人公が、その反動で大人になると女漁りを通して性的解放を試みる。その罪意識を comical にとらえることによって、ユダヤ伝統が青年の心理におよぼす破壊的影響をあばいて茶化し、性風俗の諷刺からひいてはアメリカ文化全般の大胆な批判にまでいたっている。

こうして Roth は特に60年代後半からその諷刺性、自虐性を強め、ときにグロテスクでさえあるが、この傾向はすでに60年代に入って高度技術社会の到来（個人の矮小化、非人間化）を背景にアメリカの文学風土に大きな変化（いわゆるポストモダニズムの風潮）をもたらした Black Humorists に著しい。ここでも、Yiddish 文学の人間観（shlemiel のような卑小だが比喩的人物像を持つ）や手法（寓意、比喩など）を受け継ぎ、また自らユダヤ人としての体験によりユーモアの感覚を発達させたユダヤ系の作家が重要な役割をはたすようになり、その置かれた環境から、identity その他で諷刺や揶揄の契機となるものを多くかかえ込んでいるユダヤ系自身がしばしば対象とされる。

作品の発表はほとんどが60年代以降なので略記にとどめるが、anti-Semitism について誇大な恐怖、妄想にとらわれるユダヤ系郊外生活者をコミカルに描いた (*Stern*—1962, 前稿 No. 22, p. 69 参照) Bruce J. Friedman (1930~) は、*A Mother's Kisses* (1964) でも例の定型化されたユダヤ家庭の母と息子の関係を戯画化し、口やかましい教育ママとそれに悩まされる少年の心理葛藤を扱い、Burt Blechman (1927~) は消費慾に憑かれた同化しきったユダヤ人の comic vulgarity を *How Much?* (1961) に展開する。また、行商人の父からユダヤ人のスケープゴートとしての宿命と商売に生きる道を教えられ、デパートの経営者となった Feldman の物語 *A Bad Man* (1967) で、Stanley S. Elkin (1930~) は自ら悪人の役割を引受け収監される主人公がカフカの不条理の世界で体験する奇妙な迫害を通し、自らの identity を探究していく過程を軽妙でときにグロテスクなユーモアを交えて追う。

ところでこのようなユダヤの素材、あるいは彼らを取りまく状況（上の例でいえば

母子関係や疎外など)が本稿の冒頭でも述べたように現代では拡大ないし一般化し、誇張や比喩の手法そのものにある捨象・普遍化作用とも相俟てユダヤ系 Black Humorists の作品世界もひろがっていく。この分野で代表的といわれる Joseph Heller の *Catch-22* (1961) では、軍隊内の悪夢的雰囲気の中かで、およそ軍人らしからぬ手だてを使ってでも自己を守ろうとする (anti-) hero が描かれるが、逆に浮かびあがってくるのは現代アメリカの機械文明と独善的 bureaucracy である。また、ナチ制圧下の東欧を転々とする一少年の異常で残酷な体験をもとにした第1作 *The Painted Bird* (1966, 前稿 No. 22, pp. 61—63) で、はやくもアメリカ文学界に登場した戦後のポーランドからの亡命者 Jerzy Kosinski (1933~) は、その後 *Steps* (1968) や *Being There* (1971) でそれぞれ現代生活にまといつく暗部や非人間化についてコミカルでグロテスクな presentation をおこなっている。なお、もし black humor の内包する非現実性、実験志向、幻想性、寓意性についてみるなら、新感覚派を標榜する Susan Sontag (1933~) の超現実的な *The Benefactor* (1963) など、もこのなかに入ってこよう。

それにしても程度こそ違えど滑稽さのつきまとう anti-hero は、60年代を待たず Bellow の初期の長編の主人公にもみられるところだ。徴兵を待たされ dangling な状態で徒らに自己を傷つけすりへらす Joseph、皮肉にも加害者だとおどす相手と奇妙な共生々活をする Leventhal、成功を目前にして遁走をくり返さざるを得ない運命的なピカロの Augie、経済的苦境から街をさまよい死者の姿にただ茫然と涙する人生の失敗者 Wilhelm、“I want” という内心の希求にせかされるままアフリカでライオンの真似までするはめになる Rain King の大男 Henderson、60年代に入っては、人生の危機に立って狂気の発作にかられ、該博な近代思想史の知識をもとにあてどない手紙を次々に書いていく Herzog にいたるまで、一人として例外はないようだし、Malamud の短篇の世界でも、市井の片隅で困苦に生きる人物にせよ、滑稽なおもむきの強いいわゆるイタリアものの場合も、どぎつくはないがそれこそ作者の magic touch によって独特の bitterness, irony, pathos に浸されている。さらにもう一例をつけ加えれば、ポーランド生まれで幼時にアメリカに渡り、社会学者の肩書きもある Leo Calvin Rosten (Leonard Q. Ross の筆名も使用) (1908~) は、East Side の Jewish life をユーモラスにかつ諷刺的に描き、すでに成人のための夜の英語クラスを舞台にユダヤ系移民の主人公の英語修業の頑固ぶりを扱った *The Education of Hyman Kaplan* (1938) で好評を博していたが、1959年にはその続編 *The Return of Hyman Kaplan* を出し、本格的で best-selling といわれる小説

*Captain Newman, M. D.* (1962) も comic ethnic stereotypes を使うなど機知に富んだもので、一方その広い学殖をもとに Yiddish をユーモラスな筆で解説紹介した *The Joys of Yiddish* (1968) でも反響をよんでいる。

### (7) ユダヤ的倫理の拡大——ユダヤ人はどこにもいる

聖杯伝説の枠組と再生・継承の神話のパターンにアメリカのプロ野球のヒーローの挫折をからめた処女長編 *The Natural* (1952) で、Bernard Malamud (1914~86) は、その後の作品のさまざまな萌芽（発想、構成、モチーフ、表現などの点）を感じさせても、ユダヤ的要素はおよそ稀薄だったが、これと前後して発表され、のち1958年にまとめられた短篇小説集 *Magic Barrel* (翌年 National Book Award 受賞)、それに続く第2短篇集 *Idiot First* (1963) において、作者はその多くの主題や語り口を旧約聖書のお話（*The First Seven Years*, *Angel Levine* 等）やイデッシュ文学に借りながら、苦難に喘ぐ市井のユダヤ人を素材としたり（*Angle Levine*, *The Bill*, *Take Pity*, *The Cost of Living* 等）、民族の刻印そのものにかかわる苦い結末を提示してみせた（*The Lady of the Lake*, *Jewbird*, *German Refugee* 等）。その意味でもっともユダヤ的作家と目されたが、人物、状況の巧妙な設定、人間心理の広い領域での考察、ユーモアとペーソス、magic imagination ともいうべきものによる幻想的場面転換などによって storyteller としての力量とともに、特に人生への倫理的洞察力を通してせまい Jewishness の枠にとどまらぬ個性豊かな文学世界を生み出している。

これはユダヤ系の食料品店主 Morris Bober の苦難の人生と、それに触発された異教徒の店員 Frank Alpine の倫理的価値の継承を扱った長編第2作 *The Assistant* (1957) に顕著である。Morris は新規開店した近所の同業の店にただでさえ少い客をとられ、店を売りに出そうかとまで思って青息吐息である。そこへ強盗に押し入れられ頭を殴られて寝込んでいると、当の強盗の一人 Frank がなにくわぬ顔でやってきて店の手伝いにおさまる。店主の受難はなおも続き、Frankには売上げをくすねられ、一人娘の Helen をねらわれる。かねてはやらぬ店でも早朝からひらいてサービスにつとめていた Morris は無理が重なった上、雪の日に頼まれもしない雪掻きに出て肺炎を起こし死んでしまう。まさに苦のために生きた人生だが、それを死後ラビは次のように語る、「To him I will say, “Yes, Morris Bober was to me a true Jew because he lived in the Jewish experience, which he remembered, and with the Jewish heart.” Maybe not to our formal tradition—for this I don’t ex-

cuse him—but he was true to the spirit of our life—to want for others that which he wants also for himself. He followed the Law which God gave to Moses on Sinai and told him to bring to the people. He suffered, he endured, but with hope.]<sup>9)</sup> 生前 Morris から「人には法が必要で、だれにも最善を尽さねばならぬ、これがユダヤ人の信じているものだ」と論された Frank は、気がとがめていた強盗の件を白状し、店主亡きあとは代って早朝より店の経営にあたる一方、横しまな行為におよんだ Helen への贖罪に、自ら夜のアルバイトまでして彼女を大学にいかせようとし、彼女とのあいだになんとか希望をつなぎながら、病院で「割礼」を受け、Passover の祝いのあと（復活・継承の暗示）ユダヤ人となるのだ。引用したラビの言葉やモリスの教訓は、元来ユダヤの伝統に培われたものであるにせよ、ここではむしろ博愛・人道的ひびきが強く、人間としてのユダヤ人を通して、moral の強調とその体得をあらわしているといつてよい。

さらに Malamud のこの認識は、“主義の人”として破滅を覚悟で高邁な理想（文明の擁護や考える自由）の実現に向かって進む、倫理意識に憑かれた大学講師を主人公とする *A New Life* (1961) で、いっそうヒューマニスティックな普遍的視点に立つことになり、それは引き続いて、人間としての自由と尊厳をかちとろうとする Yakov（ユダヤ人なるが故に濡れ衣を着せられた *Fixer*—1966—の主人公）の獄中の開眼と闘いに押し進められていく。

その他 ethical concern による作品として、“赤ひげ”のユダヤ版ともいうべき Gerald Green (1922～) の *The Last Angry Man* (1956) がある。ユダヤ人医師 Ableman はブルックリンのスラム街で困っている者は黒人だろうとだれだろうと、周囲の同胞の妨害や反対を押しきって助ける。ことうるさい役所仕事には反撥し、患者のわがままもびしびし叱るが、その誠実な治療活動で人々に信頼されていくのである。また前稿 (No. 22, p. 60) の Holocaust 関係でとりあげた E. L. Wallant (1926～62) の *The Pawnbroker* (1961) の主人公は、ナチの拷問による身心の傷から苦しんだ末再生するが、そのきっかけは自分をかばってくれた店員の犠牲死にたいする人間としての心の反応だった。Wallant は *The Human Season* (1960) はじめ遺作となった他の二長編においても、しばしば孤独で苦悩するユダヤ人を扱っているが、Ihab Hassan も指摘しているように、そのテーマ——the regeneration of feeling in love or grief, in responsiveness to the sacramental nature of existence<sup>10)</sup>——はすべての人間に通ずるものだろうし、作者の人間の dignity にたいする関心も強い。



元来ユダヤ人は長年にわたる迫害と受難によって、高い理想主義と反面確固とした実用主義の組み合わせさせた倫理的伝統を生み出したといわれる<sup>11)</sup>。ここからたとえば、虐げられた人々への義務感ないしゼダカの精神、自己批判や自己期待の強さ、あるいは墮落への恐れなどがでてきており、Judaismの希薄化に伴い今後そのような倫理的価値観にユダヤ人としての特性は残っていくのではないか。TorahとTalmudの最後に残った道徳、正義、倫理にかかわる部分は人間の生きる上で普遍的内容でもあり、同化の大きな流れのなかにあるユダヤ系作家もだんだんとこのような普遍的価値につく（といっても具体的にはさまざまなJewishnessのにおいや痕跡を払拭できないだろうが）と考えられ、Malamud, Green, Wallant等のこれらの作品（いわば“ユダヤ”の生地で作られた人間の服）にその傾向がうかがえるのではなかろうか。

#### (8) 現代的課題と Jewish background

モスクワからモントリオール、シカゴと転々としたユダヤ移民の家庭の厳しい生活体験を負い、その幼年期の記憶や身内への愛着などに作家としても強い情緒的特質をみせる Saul Bellow (1915～) だが、作品のモチーフの上では、彼は処女作以来西欧近代の精神史を踏まえ、現代人の直面する実存的状況のなかに humanity 志向の生き方を追求するという、きわめて現代的課題に取り組んでいる。たとえば、前稿 (No. 22, pp. 68—69) の anti-Semitism のところで触れたユダヤ人の identity を主題とする第2作 *The Victim* (1947) でも、潜在的な anti-Semitism 感情の汪溢する社会で、自らのユダヤ意識にこだわる自虐的告白めいたものも感じさせるが、一方そこには複雑化した現代社会機構のなかで、いつどこで加害と被害の関係が生じ、さらにその関係が逆転するかわからぬという不安にさらされた近代人の普遍的姿が重なり、いわば近代人のメタファとしてのユダヤ人の心的態度が描かれ、最後に宿命論からの覚醒と新しい vision の獲得が暗示されている。

多感な青年主人公 Joseph の “hardboiled-dom” 否定宣言で始まる第1作の日記体小説 *Dangling Man* (1944) は、第2次大戦中に徴兵待機で主人公が宙ぶらりんの生活を余儀なくされるという、かなり状況設定的要素の強いものだが、アパートの一室にこもった主人公は、神の不在になったルネッサンス以降の人間精神や自由について内省的考察をくり返し、自己の分身との対話を通して、神を放棄した代りとしての理性が有効でないことを知った近代人の苦悩、病弊を論ずる。さらに彼は日記をつけることにより、周囲の人々との *discommunication* のなかで卑小化され失われていく自己の identity を回復しようとする。しかし結局外界への参加を断たれている

主人公は、明確な展望を得られぬまま、内面生活の不毛を深めるとともに、自分を他者に認めさせようとして徒らに激昂し自ら傷つく。こうして倦怠と腐蝕が限界に達した Joseph は、自己規制ないし自己にたいする責任を投げうって自らを軍隊の手に委ねる。軍隊＝戦争＝死による被虐的救済への反転は、肥大化し支えを失ったエゴのたどる近代史についての苦い逆説である。30年代の不況下、左翼政治思想の影響をくぐった知性派の新進作家 Bellow のこの処女長編は、議論過剰の 気味があるが、戦後の実存的傾向を先取りした面もうかがえる。

機械文明と金の支配する都会のなかで、通じ合える言葉を失った群衆にまじって、経済的破綻に瀕したユダヤ系の中年セールスマンの主人公が絶望に喘ぐ中編 *Sieze the Day* (1956) は、まさに現代の疎外の様相そのものを抉ったものである。成功した医者として今は自適の生活を送る老父は、自分の忠告に従わず学業を放棄し、ハリウッドへ行って失敗した主人公 Wilhelm のあやまちにこだわり、安穏な生活を乱されまいと、息子の要請にたいし金銭的のみならず精神的な援助すら拒み続ける。一方子供とともに四年前から別居している妻は、仮借なく生活費の送金を迫り、しかも子供たちを彼に背かせるように育てているとしか思えない。離婚にも応じてくれないので Wilhelm が恋人と再婚することもままならず、まるで妻は彼をどこまでも罰するために生きているといていい。さらに現在の勤めは、会社の人事のいきがかりで辞めざるを得ないしまつである。そのような金の業火に灼かれる主人公の心の渇きをみすかしたかのように、過去は悪く未来も不安な状況にあって大切なのは真実な現在——“the here-and-now” なのだと説きつける精神医 Tamkin の言葉にひかれるまま、Wilhelm は残り少い持ち金全部を彼の指示した相場に賭ける。しかしその最後の頼みの綱である相場も下落してしまい、Tamkin は行方知れずになっている。彼を探して街を彷徨するうち、葬列に巻き込まれた主人公は死者の顔をみつめて号泣する。破局に直面した彼の共感を触発したのは、皮肉なことに死者なのだ。だが溢れ出る涙は死の想念に愚かれた自己にそそぐ涙であり、死者の姿こそ自分の生命を奪う悪からだれも守ってくれる者のない主人公自身の投影である。ここで作者は Wilhelm を恐怖や絶望感というよりもむしろ一種のカタルシスの状態に浸らせており、さらに過去のあやまちの贖罪を通して回心に向かわせているとも受けとれる。

次作の作者にとっては珍しく *Wasp* の主人公だが、Wilhelm をもうひとまわり大きくした（それだけ喜劇的要素も大きい）八方破れの巨漢 Henderson のアフリカでの奇異な体験を扱った *Henderson the Rain King* (1959) は、舞台をはじめ各事象の寓話的設定を旧約聖書と金枝篇からの文化人類学的資料などに拠るとともに、それ

によって人間の純粋な魂の故郷である原始世界、力強い生命力の充溢とたえずそれと隣り合わせにあらわに存在する死の恐怖、これらのものにそれぞれ主人公がアメリカ社会で感じた魂の欲求や生と死の対置を明確に照応させている。かくして Henderson のアフリカ行は失われたかつての善良さを回復し、内なる魂の叫びの対象を追い、精神の目覚めを求める心の旅となる。モチーフには、生を打ち消す最も強い要因としての死をとりあげ (Bellow にあって死の意識はこれまでもよくみられたが)、その死によっておびやかされ、疎外される魂の生命への希求を問題とする。“I want” という得体の知れぬ内奥の声にいらだち衝き動かされ、また死のイメージにかりたてられてアフリカに渡った主人公は、2番目に訪れた Dahfu 王の国で Rain King に選ばれるが、この地位は力が衰えると絞殺される運命にあるのだ。彼は王にその不当を詰るけれど、国王自身もおなじ境遇にあり、しかも亡父王の化身として放たれている兇暴なライオンを捕殺し、正式の王位につかなくてはならない。Henderson は、王が落着いてその日のくるのを待ちながら、国民の啓蒙のため医学書を読んだり、根強い因習の弊を改めていこうとするその救済者としての態度にひかれ、彼から「人間の悪しき自我是最悪の苦しみで、それにかかずらって苦悩してはならない」と忠告される。結局 Dahfu 王はライオン狩りで死に、その後継者にされた主人公は王の化身のライオンの仔を連れてアメリカへ向け脱出する。彼の学んだ教訓はかならずしもはっきりしないが、エゴの克服、死の不可避性の受容、生きるためには救わねばならぬという疎外状況への積極的働きかけとみてよいだろう。

1953年の刊行とともに作者に National Book Award をもたらし、その後60年代に向けてユダヤ系作家の活躍を促すきっかけとなったといわれるのが饒舌体を駆使した第3作 *The Adventure of Augie March* である。生の謳歌と陽気な確信が主調となり、多分に作者の体験的見聞による20, 30年代のシカゴのユダヤ人居住区の風俗も描かれていることもあって、この大作は前後の作品にみられるような問題意識が前面に出ているわけではない。養子向きの人に好かれるタイプであり、世渡りの知恵を授け進んで援助してくれる人々に恵まれていても、ユダヤ少年 Augie はいざとなると彼らの手を振り切って永遠の逃走をくり返す。この現実世界忌避の姿勢は、パトロンの一人 Einhorn の指摘した彼のなかの抵抗の要素によるのだ。兄のようにいわゆるアメリカ的成功を掴むチャンスの戸口に立たされても、みすみす損になることはわかりながら、そこに入っていくのを拒否する主人公は受身とはいえ、アメリカ社会における反逆者 (non-conformist——ピカロ的人物とされる所以) である。相手の世界に属せしめられるとき失われる自己の identity にたいして、自衛本能が働く結果か

もしれない。だがここで作者は、そのようなアメリカの現実のなかにある危険性を強調するかわりに、主人公が永遠なるものに仕えるため非常な困難を背負ってみせしめになる人物だと思わせている。さすがに Augie も後半になると、徒らに人の判断にこづきまわされることなく、自分で手に入れた所有物の上にどっかりと腰を落ち着け、妻子との安定した生活を送りたいと願う。われわれは闇商売でヨーロッパを歩き歩くその中年者の主人公の顔に、内省的憂うつ影がさすのを認めざるを得ないだろう。

こうして50年代にユダヤ系のアメリカ現代作家として地歩を築いた Bellow は、60年代に入って最初の自伝的色彩の濃い長編 *Herzog* (1964) で、それまでの主題と文体を受け継ぎかつ統合して、家庭生活の破綻のなかにあって錯乱しかけている元大学教師の主人公に、現代についての思索の苦闘を投函されぬ手紙の形で次々と独白させる一方で、幼時の回想や父との確執の記憶を濃密にからませながら己れの生きざまをさらけ出させた。作者はその後、たとえば *Mr. Sammler's Planet* (1970) や *Humboldt's Gift* (1975) におけるように、醜悪な現代世界における個人の魂の領域への考察をますます深めてきている。

以上あくまで近代人の苦難とそれを通して人間とはなにかという普遍的命題を求めるのが Bellow の立場であり、Jewish background はある意味で顕在化していないとはいえ、創作のバネとして強く働いているのは否定できない。ユダヤ系移民としての体験、見聞が素材として使われる場合 (Augie, *Herzog* など) はもちろん、中・長編のみならず短篇 (*A Father-to-Be*, *The Old System* など) にもみられる身内や血への関心は、心理的 complex のほかに強烈なユダヤの家族感情あるいは同族意識からきているだろうし、また世俗的成功というアメリカの風潮への同化志向の肉親 (特に父や兄) にたいする主人公たちの反撓には、精神的故郷であるユダヤ民族伝統 (その体现者としての祖父) への回帰を促す<sup>12)</sup> 移民世代間の事情が反映してもいる。主人公の扱い方でも、自らを苦難を背負った存在と自己省察させているケースが多く (たとえば困難を負ってみせしめになる Augie, 失敗することに彼の人生の目的と本質があらわされ、それによって苦しむ Wilhelm, 元党员活動家で闇屋に転じ次々と失敗する *Mosby's Memoirs* の Lustgarten), これはユダヤの民俗的ジョークの人物, shlemiel や shlimazl に prototype がある。さらにこのような人物規定は疎外感や自虐性、被害者ないし敗北者意識につながり、そこに人種的制約や差別感の投影をみることも容易であろう。このように創作上 Bellow にとってユダヤ系移民の体験あるいはユダヤ的資質は微妙かつ根強い要素となっている (それが彼の小説世界の手

ごたえや厚みをつくり出しているといっている)けれど、それらの素材にただよりかかるのではなく、さまざまな技法(日記体、手紙形式、饒舌調、自伝的回想など)によって現代的テーマと有機的に結びつけ、小説に寄せる確固とした信念と相俟て、彼は60年代以降たんにユダヤ系作家の中心的存在としてだけでなく、ノーベル文学賞受賞(1976)にみられるように、アメリカの代表的現代作家として作品世界を展開させていく。

次の機会には本稿の続きとして、いわゆる Jewishness を顕在化させない作家たち(Mailer など)、アメリカでようやく文学的出発をする Yiddish 作家 Singer、当時の生の声ともいふべき二つの symposium、そしてユダヤ系の進出状況などをもとに40, 50年代の概括を試みたい。

〔注〕

- 1) Nathan Glazer はその *American Judaism* (1957) のなかで、郊外生活での institutional religion の隆盛は、たとえ religious impulse を喚起するわけでもなくとも Judaism への最小の関係の保持であり、Jewish heritage のくびきを投げ捨てていない表われだとしている。
- 2) Leslie A. Fiedler, *Waiting For The End* (New York: Stein and Day, Inc., 1964), p. 65.
- 3) B. Schulberg, *What Makes Sammy Run?* (1941; rpt. Penguin Books, Ltd., 1980), Afterword to the Penguin Edition, p. 252.
- 4) Ibid., Afterword, p. 252.
- 5) Daniel Bell は *Reflection on Jewish Identity* (『Commentary』誌, 1961) で、現代の identity の危機は rationalism によるより、同一の experience と sensibility が identity の基になるため、同じ世代を求めることで過去との繁りが失われて起り、特にユダヤ人の場合がそうだと述べている。
- 6) M. S. Kaufmann, *Remember Me to God* [C. Angoff & M. Levin, ed., *The Rise of American Jewish Literature* (New York: Simon & Schuster, 1970), p. 705]
- 7) A. Guttman, *The Jewish Writer in America* (New York: Oxford Univ. Press, Inc., 1971) pp. 64-65.
- 8) P. Roth, *Eli, the Fanatic* (*The Rise of American Literature*) p. 581.
- 9) B. Malamud, *The Assistant* (1957; rpt. Penguin Books, 1967), p. 203.
- 10) I. Hassan, *Contemporary American Literature 1945-1972* (New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1973) pp. 71-72.
- 11) J. ヤフエ, 西尾忠久訳『アメリカのユダヤ人——二重人格者の集団』(日本経済新聞社, 1972) p. 293.
- 12) これについては、いくら祖父たちへの繁りを意識しても、いや却ってそれ故に、たとえば

稲 田 武 彦

Herzog のように「……髭をそり落して近代西欧人のような顔をして生きていることに、ある程度の解放感と、同じ程度の後ろめたさを、同時に感じている。……ハーツォグはこうした“砂糖をまぶした毒”のような女たちと交わることによって、彼の父祖が二千年にわたって守り続けてきたエトスから切断され、何者とも名付けられぬ非個人的な、かつてユダヤ人であったアメリカ人に転落する崩壊感覚の、その苦さと甘さを、ともに味わうのである」(入江隆則「ユダヤ的崩壊の逆説」新潮：昭和57年11月号，p. 266) という指摘もなされている。

(いなだ たけひこ 本学教授・英語)